戦下の爆弾のこわさを思い出して

池崎つよ（本町・83歳）

今にして思えば昭和十七、八年頃より満洲事変が始まってか、軍事品を作るのに追われ、人手は引っ張りだこで、夜業つづき、一時も早く出来た品は戦地へと運ばれ、国内では早速出征兵を送り出す。家又町内では、祝出征の姿が目立ち初める内に早くも女の人々は無事を祈る願いだけでか、「千人針を」と糸と針布を持ち道行く人にすがっている町角が多くなりました。

一家の柱が行く先も勝敗もわからないまま不安一ぱいで見送られる人、又見送る人は夢中でした。

一時的なのか、あるいはこのまま帰れないのではないかと思い、出る涙をこらえて行くこと痛ましい極みでした。

私の兄も明治三十九年生れの出征を二度目でした。戦地も内地も「しっかりやるさ」と云い乍ら遂にニューギニヤで水死との公報でした。残った家族の者は勝って来ると待って居たのにと泣きあかしました。

たたかいは日々騒がしく、夜昼問わずB29が数機でやって来ます。夜は外に光がもれると町内の見廻り役人にどなられて真っ暗の中敵機来襲でふるえて居りました。

外出中昼間等ふいに空から焼夷弾が落ちます。急いで橋の下にかくれて通りすぎるのを息をこらしてじっとまっています。

どうしても忘れぬ、二十年三月拾日未明でした。今までにもまさる大々空襲が又初まり空も地も只々敵機が爆弾投下をされ見る見る内に四方八方大々火災と成り地上は道行く人の波、歩く事も死人体を目で見るも痛ましい惨殺体ばかりで、自分は生きて居るのかと身をつねって痛さを知り、只々無我夢中で右往左往して一夜を明かし、自分は素足で子供は素肌にて背中にくゝりつけ、三女を手ばなすまいと握りしめ、ひょっと空を見ますと今までにもない太陽のお姿で大きくぼやけて見えます。きっと夜からの大火を受けて、余りの変りを、天であわれんで下さったと思い、地上の惨殺状態を、おくみ下さいと、一人太陽を拝し泣きつづけました。

ふっと気がついて家を見ますと、どこが我家か見分けもつかぬ中に、ショーウインド硝子の一かたまりがアメの様に成って居ます。

これから只親子が何とか生きるだけと決心を立て、あちらこちらと、食べ物あさりに走ります。行列々々で自分の番が来るのには仲々のがまんで、何日も何日も住む家がないし、その上一家バラバラで、長女は山梨に、二男は石岡に、長男は父の手伝いと云うみじめな毎日を当もなく暮らして居ります折も折、父の友人に「池崎さん、船橋に来ませんか、交通の便も良いし、食べ物もアサリもたくさん有りますョ」と親切に声をかけていただき、その方の親切にあまえてここ船橋に住まわせていただき、やっと一家

一緒に暮らせることになり、生きた気持を味あわせていただきました。

当地船橋に、家を定め子供と一緒にと思い、毎日毎日配給の列を並んで、細々命だけは保つ戦争中の情けなさは二度といやです。

寒いも暑いも考えず、子供さえ育てばと念じ、今に思えば私の姿こそ、のきのつばめに等しい姿で守りつづけたと云いますか、一日も早くたたかいが止めば良いと、そればかりを念じておりました。

その矢先の日本国に、二十年八月十五日の昼のニュースで、敗戦と聞き、「ホッ」とした気持と反面、不安が、一時にこみあげてまいりました。しばらくしてから、遠く山梨、又石岡に居る子供達を連れもどし、三男三女、手もとで一家八人揃へたのは、嬉しくて夢のような大安心でございました。

ほっとしたのも束の間で、今度は日本国に弊貨切下げと成り、何のことかと思えば、百円が一円の価値に下がってしまうのです。

それからは日本中が皆一生懸命はたらいて、日本の国を再建するのに力を合わせました。私の家でも医学費に追われましたが、皆良く学んで長女は昭和四十二年で、後の子供も皆学校に行き、末子も学位を頂き身に余るよろこびの日々を、長男家族と共々めぐまれたる私は、一人この世のしあわせ者と、毎朝戦争直後とは全く違った気持で、太陽に拝して居ります。

昭和四十七年七月に亡夫もきっと安心して居ると信じ仲むつまじくしていきたい所存です。